

# とよ・たき美肌通信

2月号 vol.139



# February

今月号のとまたち 美肌通信の  
表紙は、2月の行事である  
節分のオニさん達です！

♡ 強そうなカナボウを持ってかっこいい  
ですね！ とっても笑顔がすてきです 😊

楽器で遊ぶ事や、公園で鬼ごっこを  
する事が好きで、ダンスをおどる事が

得意な女の子が描いてくださいました！

♡ ありがとうございます。 ♡

院長はじめスタッフ一同

♡ 心より感謝いたします ♡

本早(2月号)を書いているのは新年も明けて3日であるが、年頭にあたり思う所あって、自分は何故この職業に就いたのか。又は就きたかったのかを考えてみた。そうすることによって初心に帰ることが出来るし、看脚下(今の自分がこの時何をしなければならぬかを掴んで実践すること)によって我が足下の泉に気がつくことが出来ると思ったからである。

私は4才の時に大腿四頭筋拘縮症という医原性の疾患に侵され、同年に患部の手術を受けている。又小学6年の夏休みの朝、起床時からどうも片側の上眼瞼が開かない(開瞼できない)。もっと描写的に言えば一瞬開くが数秒で上眼瞼が勝手に下りてくる。ずっと開いていられない。数日後にはある一定方向を見た時物が二重に見えるという状態(複視)に陥った。親に連れられて眼科に行、たが明らかなる病名は言われなかった。その後自治医大や獨協の小児科に行、ても分からず、親は脳腫瘍かも知れないと言われたそうだ。最終的に獨協の神経内科で告げられたのは、眼瞼型の重症筋無力症であった。その後この病気とは高校3年まで共生していくのだが、何故か医学部に入学した夏に完解してしまった。言葉ではこう簡単に書いたが、本人と親に

とってはそれなりに大変苦勞した6年間であったと記憶している。

しかたながら53才になった今、約四半世紀を医者として生きていて今思うのは、こういった(あえて平静を装、と言うか)一風変わった病気を経験しなければ自分は医者になっていなかたろうし、なれてきいなかただろうと、今では病気にさえ感謝している。ただ神経内科専門医ではないので分からないが治癒することは余りない病気であるにも拘らず、日常生活を過ごす中では不便さを全く感じずに生きていられるという事は神様に感謝せずにいられない。

今振り返って思うことがある。人生に起こる出来事の全ては必要かつ必然であるのではないかと。そしてそれらはベストのタイミングで言われるということも奥感せざるを得ない。例えば重症筋無力症が53才の今の私の年令で発症していたら、大腿四頭筋拘縮症の手術をして下さった先生と私の巡り会いが4才の私でなかつたら、その先生は私の脳裏にどう記憶されたか。全てが必然・必要・ベストであろう。

院長, 拝